

審査の結果の要旨

氏名 原田満里子

近年ケアの社会化が叫ばれるなかで障害者の家族への支援もまた注目されつつある。障害者の長寿化や高齢化が進んでいる現代、親亡きあとも頼りにされることが多いのがきょうだいなのだが、その意識のありようや支援の方法の検討はあまり進んでいない。こうした背景のもと、本論文は、「障害者のきょうだいを生きるとはどのようなことなのか」という問いから出発し、少数事例の語りの詳細な質的分析を通じて障害者のきょうだいもつライフストーリー（人生の物語）の共通特徴と個人差を理解し、きょうだい支援につなげる知見を得ることを試みたものである。

本論は7章構成で展開される。第1章では、障害者の家族の体験と支援に関する先行研究が概観され、きょうだいに注目することの必要性とライフストーリーという視点を用いることの意義が論じられた。第2章では、研究方法として活用および工夫された「対話的自己エスノグラフィ」と「相互作用的インタビュー」の理論的基盤とその手続きが示された。第3章では、きょうだいでもある筆者自身を対象に、対話者を設定して自己対象化を促進する新たな自己エスノグラフィの試みが報告され、そのなかで筆者は、障害のある妹の「主体性」の獲得というストーリーを構成したが、同時にそのストーリーに十分納得していない矛盾する自己も抽出した。第4章では、筆者と他のきょうだいによる継続的な語り合いを資料とした分析が行われ、2名の協力者との間で浮かび上がってきたストーリーが記述された。次いで第3章と併せて、きょうだいは青年期的な自立のストーリーに加え、障害をもつ同胞を気遣うもう1つのストーリーを併走させていること、すなわち「二重のライフストーリーを生きている」との仮説が生成された。第5章では、この仮説を精緻化するために別の2人のきょうだいとの対話が行われ、障害種や家族状況等の条件のもとで変化する「二重のライフストーリー」のバリエーションが示された。さらに第6章では、こうした語り合いを通じてライフストーリーが明確化してくる過程に目を向け、相互作用の類型をライフストーリーの「共有」と「交差」の2つに概念化した。最後に第7章では、本研究が障害者きょうだいの支援に対してもつ意義や質的研究の方法論としての意義をまとめ、その上で今後の課題について議論が行われた。

本論は、少数事例を対話過程に巻き込む形でのデータ収集を進めることで、質問紙や1回限りの面接では見えにくい障害者きょうだいの体験過程にアプローチし、今後の研究に資する仮説の生成に成功している。従来のライフストーリー研究が、ともすれば個人の内部にある物語を捉えようとしていたのに対し、「二重のライフストーリー」はライフストーリーが本来他者のそれとの重ね合わせを含むことを示唆している点でも評価できる。また、語り合いのプロセスはピア・カウンセリングの過程とも共通する部分をもち、今後の臨床心理学的実践の参考資料にもなりうる。加えて、相互作用性を重視した研究方法論上の工夫は、心理学における質的研究の可能性を広げるものと考えられる。以上の点で、本論文は博士（教育学）の学位の水準に達しているものと評価された。